

『北海道のサンショウウオたち』

佐藤孝則・松井正文編著、エコ・ネットワーク 2013年

おやさと研究所主任  
佐藤 浩司 Sato Koji

「元初りの話」に出てくる「うを」は、大和でお百姓さんが呼んでいた「畑どじょう」、つまり「サンショウウオ」ではないでしょうか。

これは、おやさと研究所に赴任して間もない編著者の代表である佐藤孝則氏が、毎月行っているおやさと研究所の研究報告会においての発言である。

救済のために教祖によって説かれ、一般には天理教の創世説話として知られている「元初りの話」の中で、神は、泥海の中から「うを」と「み」を引き寄せて人間の原父母の役割をになわせた。この「うを」には、同じく泥海の中より引き寄せられた「しやち」が、神によって食べられ、その性を見定められて、仕込まれ、これによって「うを」は、人間創造の時の男雛型・種の理の役割をになったのである。この「うを」については、「鱗のない魚」、あるいは「ぎ(げい)魚という魚」などといわれ、サンショウウオとの説はない。したがって、佐藤氏の「うを」が「サンショウウオ」説には、いささか衝撃を受けたものである。私には、同じく人間の「たね」とされた「どじょう」が似つかわしく思う。その後、永年におやさと、サンショウウオを研究してこられた佐藤氏のご意見を何度となく伺い、納得まではいかないがそうかもしれないと受け入れられるようになった。本書には、このことについての記述は一切ないが、先生の30有余年におよび、いまなお続けられているサンショウウオの研究、ことに北海道に棲息するエゾサンショウウオとキタサンショウウオに関する網羅的でしかも最新の研究の成果を記したものである。

氏にとっては、いわば、サンショウウオは単なる研究対象ではなく、愛すべき仲間であり、したがって本書は、こよなく愛し続けているサンショウウオとの愛の証しということになる。

本書は、多くの人に関心をもって貰いたいという編著者の意図から、全7章は、面白い構成になっている。

1、2章は、小・中学生を対象としてサンショウウオの観察とその仲間であるカエルやイモリとの相違について分かりやすく解説している。とくに、北海道に分布する2種類のサンショウウオの見分け方や観察のさいの注意点、飼育の仕方なども紹介している。またサンショウウオの現状と保護について知ってもらいたいとの思いは、本書の最初の部分にまとめている。3、4章は、高校生および一般を対象として、サンショウウオの分布と繁殖、年齢構成、行動圏、食性、天敵、病気といった生態について地道な調査をもとに明らかにしている。この中には、初めて紹介される生態情報がたくさん含まれている。エゾサンショウウオは大きさによって大型、標準、小型の三つの個体群に区分されること、調査研究によって、越冬場所や食べ物、大型幼生の存在についての詳細が明らかになったことなどが紹介されている。

5、6、7章は大学生・研究者を対象とし、5章では、サンショウウオでは世界で初めて、継続的に「墜落わな」を設置し、生体を傷つけることなく捕獲する「墜落わな」調査法を用い、サンショウウオの移動(距離、方向、分散)、活動範囲などの行動を、天候や時間軸による変化の中で記録し、詳述している。

数年にもおよぶ息の長い、繰り返して実施される調査もさることながら、1回の調査にしても、四六時中何日も、しかも北海道の寒暑の厳しい中、当然、ヒグマやマムシ、蚊といった調査にはいてほしくないものに対峙しながらでの調査報告である。6章は、調査研究の成果の一つとして、サンショウウオの保護と保全についての具体的な取

り組みについて記述している。帯広市は、道路建設に際して、棲息しているエゾサンショウウオに配慮した工法などが評価され、2011年全国街路事業促進協議会の特別賞を授与された。これはもとより、佐藤氏を中心とした調査研究が直接社会に貢献したのである。研究者として誇りであろう。

7章は、共編著者である松井氏の、サンショウウオに関する発生、分化や繁殖過程に関する地史を踏まえた論説と、近年の分子生物学や遺伝子工学などの成果を踏まえた研究の論述である。いささか専門的で難しいところもあるが、地球における生物全体の中でのサンショウウオの位置を確認するには、最適である。ミトコンドリアDNAを元に分子系統樹を作ると、カメがトリやワニに近く、核DNAで解析すると、よりワニに近いと近年の新聞報道にあり、これまで形態的によって考えられてきた生物の系統樹を見直すという動きに、同様に興味をそそられる。人によっては、この章から読み始めるのも良いかも知れない。

サンショウウオは、北海道で生まれ育った私にとって、馴染みのある生き物で、国語の時間に習った井伏鱒二の『山椒魚』には、違和感を覚えていた。子どもの頃に遊んだサンショウウオがエゾサンショウウオであり、水中にいるものとばかり思っていたのが、繁殖期の一時期であると初めて知った。

顔や手やその仕草をみると、「サンショウウオ」が「うを」であるように、だんだん納得しそうである。とにかく、一読したものととして、読み進むにつれて、次第に理解と興味が深まってきたことは確かである。

佐藤氏は、生物学者として北海道のサンショウウオを調査研究してこられた経験をもとに、絶滅危惧種の保全のみならず、環境問題全体について取り組んでいる。専門の研究会の組織、フォーラム、シンポジウム、展示会を通じ幅広い社会への啓蒙、また実際に、NGOを立ち上げて「布留川の清掃」を初めとする具体的な活動を行っている。環境による小生物の生死や多寡が、単に小生物の問題ではなく、われわれ人類にも関わりのあることを、教えてくれる好著である。

